

大学図書館における学生スタッフの存在と役割

山名 雄太

1. はじめに

私は立命館アジア太平洋大学の図書館（以下 APU ライブラリー）で学生スタッフ（ライブラリーアシスタント：通称 IA）として働いている。今夏、職場での勧めもあり別府大学にて司書講習を受講する機会に恵まれた。その中で、学生スタッフという役職を本格的に導入している大学図書館が日本では非常に少ないことを知った。しかしながら、ハーバード大学をはじめとする海外の大学図書館では学生スタッフも多数活躍しており、今回は APU ライブラリーにおいて重要な役割を果たしている IA を紹介すると共に、その役割や今後の課題などを説明したい。

2. IA とは

まずは、APU ライブラリーで活躍する IA の概要と仕事内容を紹介する。APU ライブラリーでは、現在 30 名程度の学生スタッフ IA が活躍中である。ご存知の方も多いかと思うが、APU は学生の約半数は国際学生であり、IA にも中国・ベトナム・インドネシアといった国々からやって来た国際学生が所属している。募集は毎年秋に行われ、今年で 5 回目となる。

IA の仕事は、カウンターや排架作業などを行うシフト業務と、新入生向けのガイダンスや、各キャンペーン等を行うチーム業務に二分される。前者のシフト業務は、カウンターでの貸出/返却作業や蔵書検索、そして返却された本を書架に戻す排架作業など、ごく一般的な「図書館業務」と言える。後者のチーム業務は、少しばかり厄介な仕事である。IA は採用と同時に「企画

チーム	主な仕事
企画	<ul style="list-style-type: none">・図書館関連のイベント企画・IA 制作のパンフレット「ビブリオマニア」の編集・IA オススメ本掲示板の更新
ガイダンス	<ul style="list-style-type: none">・学生及び教職員へのオンライン・データベースの普及活動・新入生や IA 募集のガイダンス実施
マナー	<ul style="list-style-type: none">・図書館内でのマナーアップ活動 (利用者への指導・ポスター作成・マナー状況の調査)実施
リーダー (兼任)	<ul style="list-style-type: none">・IA 全体ミーティングの実施・各チームの統率・親睦会などの企画

「ガイダンス」「マナー」という 3 つのチームのいずれかに所属することになっている。

各チームは月数回ミーティングを開き、学生の視点から知恵を絞り、快適かつ利用しやすい APU ライブラリーづくりと学

生への利用促進を図っている。これらのチーム業務は学生の目にはなかなか触れないものの、学

生である LA だけが出来る重要な仕事である。また、いずれの仕事も「企画力」「コミュニケーションスキル」「プレゼンテーションスキル」などが必要となる。以上の2点が LA の主な仕事内容である。

3. LA のメリット

では、実際に LA は APU ライブラリーにどのように貢献しているのだろうか。

私が考える最大のメリットは、月並みではあるが、LA が「学生と図書館の繋ぎ役」の存在を果たしていることである。「自分と同じ学生が図書館で働いている」—そんな環境があれば、学生は図書館の内でも外でも、図書館員よりも身近な LA に気軽に質問することが出来る。幸いなことに、私の友達は図書館に関する様々な質問や要望を遠慮無く LA の私に言ってきてくれる。私も図書館に関する情報は、可能な限り友達に知らせるようにしている。このような相互の情報交換のお陰か、私の友達は概して普通の学生よりも頻繁に図書館に足を運んでくれる。とても有り難いことだ。

そして、大学図書館というものは、非常に多くの機能を持つ。APU ライブラリーが行っている学生へのサービスも多岐に渡るのだが、それ故に利用者である学生の多くは折角のサービスを使いこなせているとは言い難い。例えば、我々の高い学費から年間数千万円を投じて提供される 50 種類以上のオンライン・データベースはその利用数の低さが学校側の悩みの種である。レファレンスサービスや立命館本学の図書館との相互貸借 (ILL) システムに至っては、下級生を中心にその存在すら知らない者も多い。恥ずかしながら、私自身も LA になってからこれらの機能の存在を知った。このような問題を克服すべく、LA は積極的に図書館の便利な機能を宣伝してきた。特にオンライン・データベースについては、毎年新生必修の授業で実際に LA が授業に赴き、データベースの利用方法を解説し、1 回生の段階からの積極的な利用を促している。

更に LA 自身も一学生、つまりは図書館の利用者であり、学生視点で図書館を捉えることができる。これに前述の「LA に寄せられる友達からの質問・要望」を加えれば、「学生の図書館に対するナマの声」という大学図書館が最も欲しい情報が手に入ることとなる。その内容は、「購読している外国紙は学生向きではない」といったものや「書架の配置が見難い」など、図書館員では到底気付かないことばかりである。これらの学生の意見は LA のミーティングで逐一報告され、更なる利便性の向上に一役買っている。

このように、LA は APU ライブラリーにとって学生と図書館の間の橋渡し役として、なくてはならない存在となっている。

4. LA の課題

これまででは、LA がもたらすメリットを紹介したが、一方で、LA にはまだ乗り越えるべき様々な問題も存在している。ここでは、LA が現在抱えている課題を挙げ、その解決策を考えてみたい。

第一の問題は、LAのモチベーション不足である。現実には、前述のLAの2つの仕事（シフト業務・チーム業務）を積極的にこなしてくれるLAは全体の半数程度である。残りの半数には、シフト業務しか行わない者や、中には採用以来シフトにもチーム業務にも殆ど顔を出さずに蒸発する者もいる。一体、なぜこのような事態が発生するのか。この場で言うのは不適切かも知れないが、私が考える最大の原因は、仕事に対する対価、すなわちLAの独特な給与体系にある。LAは一応、APUライブラリーを運営する委託企業と労働契約を結び、事実上学生アルバイトという位置付けである。この学生アルバイトというのが厄介な言葉で、山の上にあつて通学にも時間がかかるAPUの学生にとって、授業の合間に大学で働けるLAはとても魅力的に感じるのであろう。実際、多くの学生がこのような思惑でLAに応募してくる。しかしながら、学生が考えるLAの仕事であるシフト業務だけではLAの給与は世間一般の大学生がアルバイトで稼ぐ額には到底及ばない。LAの多くが収入の主としているシフト業務については、平日が1時間半～2時間のシフトが週35枠、土日の4時間のシフトが4枠、計39枠のシフトを20人程度のLAでシェアする。これでお分かりだと思いが、一人当たり週2回、時間にして4時間程度働くことができればいい方で、それだけでは小遣い程度にも満たない。これはAPUのLAに限らず、どこの大学の学生アルバイトでも抱えている問題ではないだろうか。LAの選考については、前述の都合のよいバイト感覚だけで応募してきた学生は採用しないようにしているようだが、私自身、最初の半年は給与明細を見てはがっかりする日々であった。

しかしながら、ありがたい事に現在は他の学生が行うアルバイトと遜色ない額を頂いている。別に時給が上がったわけでもなく、毎日シフトに入れるようになった訳でもない。答えは単純、LAの仕事の50%を占める「チーム業務」に力を入れただけである。チーム業務もシフトと同じ時給である。仕事が無ければ、自ら積極的に仕事を探し（創り）、提案し、実行すればよい。また、このような自主的な仕事を行っている、個人的に仕事を頼まれることさえある。シフトだけ入り、給与が少ないことにただ嘆くのではなく、自分から積極的に動くことこそが、LAにおけるモチベーション向上の秘訣であり、そのようなスキルと意欲を兼ね備えた学生を積極的に取り入れる必要がある。

次の問題は、LAの専門性の不足である。LAは採用後、図書館に関する基本的な業務（カウンター・排架など）が行えるように研修を行うが、それ以上の知識に関しては殆ど教わらない。従って、利用者からの専門的な質問への回答や、図書館内部の事情に関する要望や言及はできない。図書館の根本的なことを知らない故に、時折図書館の運営方針や常識を無視した無茶な要求をすることもあるが、後述する意思決定の遅さと相まって、折角の学生からの貴重な要望が通らないことが多い。そこで、今年度は私を含め2名のLAが別府大学の司書講習に参加し、図書館について深く正しく知ることを試みた。これにより、図書館に対してより現実的かつ具体性のある企画や改善策を出すことが出来るのではないかと考えている。

最後に、昨今多くの図書館が導入している管理委託制度がもたらす障害について触れたい。司書講習を通じ、管理委託制度というシステムを知った。図書館における「所有と経営の分離」のことであるが、APUライブラリーはこの管理委託制度の最たる例である。図書館経営の効率化・専門化・そしてコストカットを目的としたこのシステムであるが、図書館全体の意思決定を遅らせ

る温床になっているのではないだろうか。例えば、LAや図書館員がライブラリーの施設やシステムについて、何らかの改善策を提示する場合には、必ず大学側との会議に持ちかけ、承認を得る必要がある。また、逆の場合も然りで、大学の職員がライブラリーやLAに関して何か気付いた点があったとしても、直接指示はできない。同じく前述のプロセスを踏むこととなる。これでは早急な改善は到底望めず、また、多くの職員からの承認が必要なため、実際に実行できるものは極僅かとなってしまふ。管理委託制度を否定するつもりはないが、現状の意思決定の遅さでは「とにかくやってみよう」という最前線で働くLAや図書館員の向上心を削いでいる。これはAPUライブラリーに限らず、今後多くの図書館が抱える問題となるだろう。組織が複雑化するからこそ、スムーズに意思決定のできる風通しの良い組織とシステムを作るべきである。

5. 最後に

ここまで、図書館における学生スタッフの役割と課題等をAPUライブラリーのLAを例に説明した。大学図書館における学生スタッフはまだ日本では少数派であるが、「利用者の視点を持った図書館員」の存在は利用者としても図書館としても非常に歓迎すべき存在であり、将来的に多くの大学で導入されるのではないかと思う。前述の様々な課題があるが、私自身も残りの大学生活を通じてそれらの課題をクリアできるように努力すると共に、この先多くの大学図書館で学生スタッフを導入され、本当の意味で利用者にとって使いやすいものとなることを望んでいる。



LA 業務中 (APU ライブラリー)

(やまな・ゆうた 立命館アジア太平洋大学 アジア太平洋マネジメント学部 3回生)